

『九ポイント假名附活字見本帳』に見るルビ付き活字

—外来語定着の一側面—

石井 久美子

1. はじめに

活字見本帳は、印刷・製版会社が文字の見本を集めて、印刷・製版利用者の便宜を図った冊子で、戦前から継続して発行されていた^①。その中の一つに、秀英舎から昭和4年に発行された『九ポイント假名附活字見本帳』があり、論者の調査によって、ルビ付き活字の見本を主に掲載していることが判明した。なお、ルビ付き活字とは、「漢字とルビが一体となった活字」^②のことである。

本稿では、この『九ポイント假名附活字見本帳』に見られるルビ付き活字の中でも、カタカナルビのついたルビ付き活字^③を取り上げ、そのルビと漢字の關係に注目し、実態を明らかにすることを目的とする。そして、それらカタカナルビのルビ付き活字の、固有名詞および一般名詞への使用の可能性について、現段階で明らかになったところまでを報告する。

2. 先行研究

ルビ付き活字に関する指摘はほとんどなく、まとまった研究は見られない。数少ない指摘を挙げると、矢作(1981:1)は、ルビ付き活字について、次のように述べている^④。

とくに、明治の末から大正にかけて新聞の情報量は増量の一途をたどり、小さな活字をもってこれに対処したことから、大正八年には六・五ポイントの新聞用活字が出現した。くわえて、新聞製作のスピードアップは至上命令である。そこで登場したのがルビ付活字である。

ルビ付活字は、煩雑な組版作業をできるだけ避けるため、漢字の右傍らにルビを付けた母型を作り、それによって鋳造したもの。大正二年、築地活版所の六号ルビ付がその最初で、その後七・五ポイント、さらに秀英舎などの九ポイント、八ポイントがあり、広く新聞、雑誌に利用された。これは新聞の過当競争が生んだ活字の知恵といえなくもない。しかし、書籍を対象にした四号、五号活字にはこうした現象はみられなかった。

ここでは、ルビ付き活字は大正2年が最初とあるが、その始まりはさらに遡ることができそうである。大阪朝日新聞社の社員であった松田幾之助が「ルビ付の活字」(『新聞記者打明け話』)という文章で当時を回想している。それによれば、国民の教育の程度に合わせて、漢字に発音通りの仮名をつけて、読者を誘い入れたいということになり、活字の横に小さい仮名を一字ずつ付けていたが、従業員は僅かで毎日徹

夜であったため、一工夫しなければならぬ状況にあったという。「ルビ付き活字」の誕生については、次のように書いている。

活字を造る原型に振り仮名をつけておけばよいのだ。『占めた!』と明治二十九年から一年間あまりかゝつて、遂に振り仮名のついた活字を約五千種類あまり造りあげた。この活字で新聞が出来てみると、さあ大變、他の新聞に出てない記事が振り仮名つきで堂々と朝日に載つたといふので、方々から研究に来る。當時特許をとつておかうかとの話もあつたが、村山社長は公益になることだから、開放しようぢやないか、とあつて、その後築地活版が朝日の振り仮名付き活字を見學し、その製作をはじめた。その後毎日新聞やその他の新聞が築地からこれを手に入れ廣くゆきわたつた。かくしてわが國の活版界に、『ルビ付き活字の時代』といふ一エポックを劃した。

今では、ルビ付き活字は全國至る所の新聞・雑誌に用ひられ、讀者と離れ難い親しみをもつて迎へられてゐる。(pp.138-139)

ここから、ルビ付き活字の発生は、明治30年頃ということが出来る。この文章が掲載されている『新聞記者打明け話』が刊行されたのは昭和3年であり、ちょうど『九ポイント假名附活字見本帳』(昭和4年)と時期が重なっている。初めは新聞で使われたルビ付き活字が昭和初期にはさまざまな媒体で盛んに用いられていたことがわかる。

当時の表記状況を指摘した論文はいくつかあるが、活字にまで踏み込んだものはほとんどない。対象とする時代は本稿よりも少し遡るが、井口(2015)では、活字の使用状況も考慮した上で、幕末から明治にかけての新聞や日誌類の字音假名遣いについて考察している。また、井口(2016)では、昭和3年の「字音假名遣い対照表」を、新聞が用いた字音語ルビの運用体系のなかで位置づけている。

また、当時の活字の状況は、矢作(1976)などで取り上げられているが、書体や活字のサイズについての指摘であり、どのような語を示すのに用いられたかという点においては、研究を進めていく必要がある状況だといえる。

3. 資料について

本稿で調査対象の資料としたのは、印刷博物館^⑥所蔵の『九ポイント假名附活字見本帳』である。次ページに図1として表紙を掲載している。

発行年月日は、1929(昭和4)年5月15日で、発行者は、「株式会社秀英舎銀座營業所(東京市京橋區南鍋町二丁目十五番地)」である。蔵書印は、「大日本印刷株式会社銀座活字販賣店(東京市京橋區銀座七丁目四番地)」となっている。発行者である秀英舎は、1876(明治9)年10月9日に、数寄屋河岸御門外の弥左衛門町(現銀座四丁目二番)にて創業した^⑥。1935(昭和10)年2月26日に、秀英舎と日清印刷が合併し、社名を大日本印刷としている^⑦。

この『九ポイント假名附活字見本帳』は、片塩(2004:35)の「活字見本帳一覧表」の中の「ポイント系」にも、同じ発行年月日、発行者のものが挙げられているが、そこには、この活字見本帳についての詳しい解説はなされていない。

体裁は、本文が縦書きで、全66ページからなる。項目は複数あり、その並び順は、ひらがなルビの付いた漢字、カタカナルビの付いた漢字、「數字」、「印物」、「片假名」、「平假名」、「太字片假名」、「太字平假名」、

ない表記となっており、片仮名の項目で「々」「々」というように、踊り字のみにルビが見られる。

それぞれの並び順にも特徴があり、ひらがなルビのルビ付き活字は漢字の部首の画数順に、カタカナルビのルビ付き活字はルビのイロハ順に、見出しが立てられている。言い換えれば、ひらがなルビのルビ付き活字は漢字に注目した並び順であり、同じ漢字ごとに異なるルビのついたものがまとまって掲載されている。一方、カタカナルビのルビ付き活字はルビに注目した並び順であり、ルビの共通するものがまとまっている。そして、「片仮名」、「平仮名」、「太字片仮名」、「太字平仮名」はいずれもいろは順に並べられており、「フ」(コト)や「方」(より)といった合字も見られる。

4. カタカナルビのルビ付き活字の掲載状況

本稿で取り上げている、カタカナルビのルビ付き活字は、『九ポイント假名附活字見本帳』の60ページから64ページに出てきている。次ページに、カタカナルビのルビ付き活字の最初の部分を拡大したものを掲載している(図2)。

前節にも述べたように、ルビ部分のイロハ順^⑧に、【イ部】【ロ部】などの見出しを冠して挙げられており、その最後は【ン部】【一部】となっている^⑨。そして、そこに載せられているカタカナルビのルビ付き活字は全部で414種類である。

『九ポイント假名附活字見本帳』に現れているカタカナルビのルビ付き活字の特徴を捉えるにあたって、ルビと漢字の関係を考えたい。

まず、ルビの役割を考えるために、「振り仮名」について、『日本語大事典』(pp.1758~1759)を見ると、次のように説明されている。

漢字や漢字列の読み方を示すために漢字のわきに小書きで添える仮名。古くは傍訓^{ぼうくん}と言われていたが、幕末頃から「つげがな」あるいは「振り仮名」とも言われ、明治一〇年代には「振り仮名」が一般的になった。機能の面から「よみがな」と呼ばれることもある。印刷用語の「ルビ」は明治三〇年代頃からは、振り仮名の基本的な役割は、文脈において用いられている漢字に対して、複数ありえる読みのなかで、そこで用いる読みを指定することにある。場合により、語義を表示することもある。

つまり、振り仮名は漢字の読みを指定することが主たる役目と考えられているのである。

そして、倉島(2002:182)は、ルビ活字とルビ付き活字の違いについて次のように指摘している。

活版で振り仮名すなわちルビを付けるには、二通りの方法があった。一つは漢字の脇にルビ活字を組み込む方法であり、もう一つは漢字とルビが一体となった活字(ルビ付き活字)を使用する方法であった。前者は、振り仮名用のごく小さな活字を使うので、組版に高度の技術が必要となり、手数が掛かって作業のスピードが落ちる。また後者は、一字で読み方がいく通りもある漢字には、その読み方の数だけ活字の種類が必要になり、準備する活字の種類が大幅に増える。いずれも組版に当たっては負担が増えることになる。

このように、ルビ付き活字には、一つの漢字に対して異なる読みを反映した複数の活字が用意されているものがあるということである。

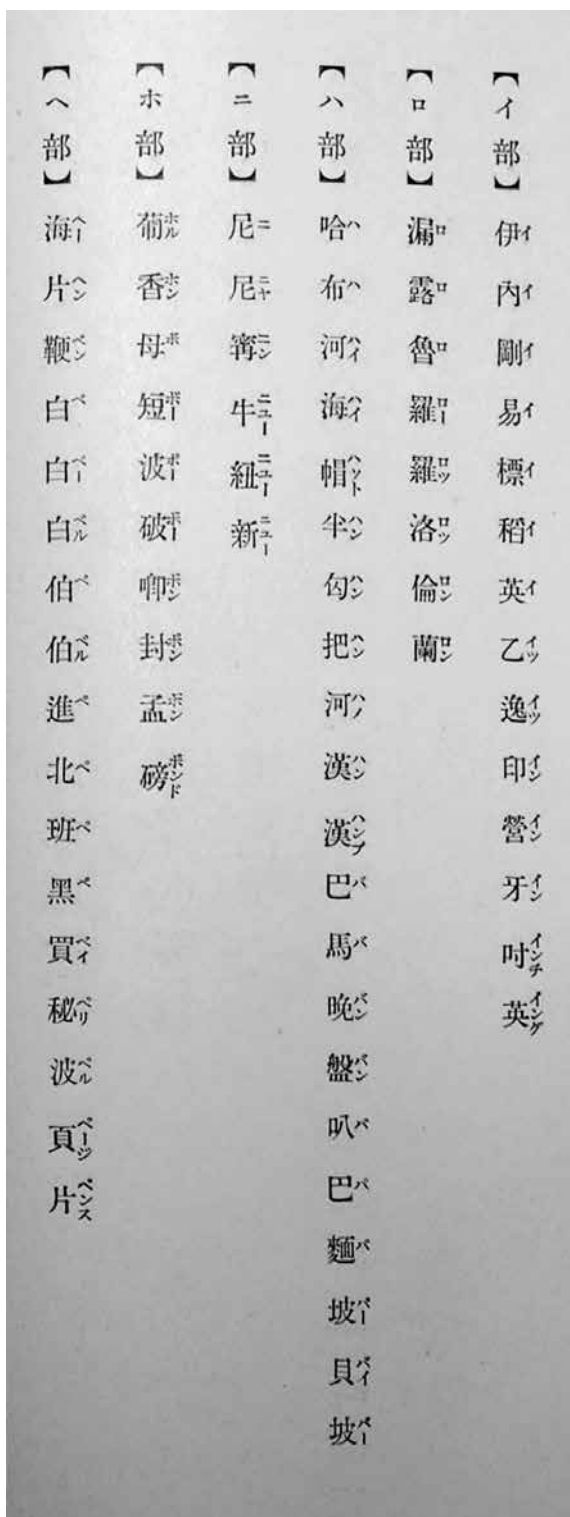


図2 『九ポイント假名附活字見本帳』カタカナルビのルビ付き活字
(所蔵：凸版印刷株式会社 印刷博物館蔵)

これを踏まえて、『九ポイント假名附活字見本帳』のカタカナルビのルビ付き活字について、共通の漢字を用いているものに注目し、どのようなルビが付いたものがあるのか検証したい。カタカナルビは前にも述べたとおり、ルビのイロハ順に並んでおり、そのままでは分かりにくいので、共通の漢字を持ち、異なるルビのついたものを一覧にまとめ直したものが表1である。

ルビと漢字の関係を見ると、表1には、「阿」^ア「馬」^マ「比」^ヒ「利」^リなど漢字音が反映されたと思われるルビ付き活字が多く見られる。こうしたルビ付き活字は、例えば、「馬」なら、「ウマ」や「バ」とも読むが、それではなく「マ」なのだというのをルビによって指定する機能を持っているということができ、これが基本のルビだといえる。

表1で最もルビの種類が多いのは、「西」であり、そのルビは、「シ」「ジ」「シー」「ジー」「シヤ」「ス」「チベ」「ツル」の8種類である。この8種類の中にも表れているように、カタカナ表記した場合の、清濁の違い、長音の有無などによりルビにバリエーションが生じている。

一方で、原語や漢字音の影響により、ルビに同じ子音をもつものが多くなっているのも特徴である。

表1 漢字が共通していてルビが複数あるもの

漢字	ルビ	漢字	ルビ	漢字	ルビ	漢字	ルビ	漢字	ルビ	漢字	ルビ
阿	ア	格	ツト	斯	ス	西	シ	船	ト	利	ヤ
阿	ヲ	格	トラ	斯	スト	西	ジ	船	ドツ	利	リ
亞	ア	河	ハイ	白	ベ	西	シー	船	ブリ	利	リア
亞	ト	河	ハノ	白	ベー	西	ジー	古	コ	利	リー
尼	ニ	漢	ハン	白	ベル	西	シヤ	古	ゴ	利	リス
尼	ニヤ	漢	ハンブ	白	リ	西	ス	貢	グ	利	リヤ
維	ウキ	義	ギー	瑞	スキ	西	チベ	貢	グン	留	ジヤ
維	ピア	義	ーム	瑞	スキツ	西	ツル	港	コン	留	ルー
沽	ク	吉	ギ	聖	セント	布	ハ	港	シスコ	留	ルビー
沽	クー	吉	キツ	聖	サン	布	フ	耳	ジユ	露	ユー
馬	バ	吉	チー	蘇	エス	伯	ブ	耳	セー	露	ロ
馬	マ	牙	イン	蘇	スエ	伯	ベ	耳	ル	哇	ワ
馬	マー	牙	ガ	蘇	スコ	伯	ベル	羅	アム	哇	ワイ
馬	メ	牙	ガリ	蘇	スコツ	比	ヒ	羅	ルー	哈	カ
馬	メリ	牙	ガル	蘇	ソ	比	ビ	羅	ロー	哈	ガ
海	ハイ	黒	アム	坦	タン	比	ピ	羅	ロツ	哈	ハ
海	ヘー	黒	ペ	坦	ンチ	比	ピー	來	レイ	坡	バー
英	イ	黒	モン	担	ビコル	比	ファイ	來	レー	坡	パー
英	イング	薩	サ	丁	チノー	普	フ	蘭	ラン	坡	ール
及	ブト	薩	サツ	丁	チン	普	ブ	蘭	ランド	堡	ブル
及	ブト	里	リ	丁	デン	塞	セ	蘭	ロン	堡	ルグ
嘉	ガ	里	リー	典	デン	塞	ユ	蘭	ンダ	堡	ープル
嘉	ガポ	里	リヤ	典	ーテン	塞	ユー	蘭	ンド	栗	フ
科	クワ	士	ス	巴	バ	太	スト			栗	フー
科	コー	士	ズ	巴	パ	太	タ				
香	ク	士	スタ	波	ペル	太	ター				
香	クー	斯	シヤ	波	ポー	太	ヤ				

漢字音の反映以外には、ルビ部分の外来語に訳語を当てた例が見られる。表1では、「聖（セント）」^⑧というルビ付き活字がそれに該当する。表1に挙げたもの以外にも、『九ポイント假名附活字見本帳』には、「鎖（チエーン）」「卓（テーブル）」「橙（オレンジ）」「檣（マスト）」などが見られる。

さらに、表1で、「典」に対して「一テン」というルビがついている例があるように、ルビが漢字音とは完全に一致しないものも含まれる。これについては、ルビと漢字の関係を1字単位では説明できないため、詳しくは「6. ルビと漢字の配置と対応関係」で述べる。

5. カタカナルビのルビ付き活字によって表示できる語

ここまで1字単位でルビと漢字の関係を見てきたが、ここからは、カタカナルビを使用している点に注目し、ルビ付き活字によって表示することのできる語について考えたい。

日本語でカタカナ表記される語といえば、まず外来語が思いあたる。

明治期には、外国地名をはじめとする外来語表記に、ルビと漢字の二重表記が多用され、その漢字も仮名も多数のバリエーションがあったが、石井（2016）では、大正期の外国地名における略称表記と非略称表記^⑨に用いられている漢字が共通していることを指摘している。つまり、時代を経るに従って、外国地名の漢字表記は統一されてきているのである。

この変化を踏まえると、昭和初期の活字見本帳に掲載されているルビ付き活字には、ある語を表す際に、ルビ部分のカタカナについても、本行部分の漢字についても^⑩、多様であった表記が収斂し、固定化した結果が反映されていると考えられる。

このように、ルビと漢字の関係について、語を単位に考える場合、田島（1998：6）が参考になる。その中では、語とその語を表示するために用いられる漢字連結との対応について述べられており、漢語は字音的表記と意味的表記、和語は訓的表記と意味的表記、外来語は音的表記と意味的表記というように、それぞれ複数の表記方法が採用されていると指摘する。言い換えれば、漢語も和語も外来語も、音に対応する表記と、意味を反映した表記の2種類が見られるということになる。これをルビと漢字の関係に置き換えて考えると、ルビに対して当てられる漢字には、音的表記と意味的表記の2種類があるということになる。

この考え方を踏まえた上で、固有名詞と一般名詞のそれぞれについて、ルビ付き活字がどのような語に使用されたのか、その可能性を探っていく。カタカナルビのついたものに注目しているため、必然的に外来語が中心となっているが、語種は限定せず、和語や漢語の可能性も考えている。

ここで対象とするのは、『九ポイント假名附活字見本帳』に載せられているカタカナルビのルビ付き活字のみを用いて、それらを組み合わせることによって作ることのできる語である。例えば、「^ア亞」「^リ米」「^カ利」「^カ加」という4つのルビ付き活字を組み合わせることで「^ア亞^リ米^カ利加」という語を作ることが可能である。

なお、1つのルビ付き活字が1つの語を専用に表すものとして作られたとは限らず、複数の語の表示に使用されたと考えられる。例えば、「^バ巴」は「^バ巴^リ里」も「^ヨ歐^ロ羅^バ巴」も表すことができる。そのため、ここからの分析では、ルビ付き活字の組み合わせによって、使用が想定されうる語の候補全てを考察の対象とする。

上記を踏まえると、当該のルビ付き活字の製作にあたって想定されていた語がほぼ特定可能と考えられる例は、表記の違いも含めると延べ145例である。「^ド獨^イ逸」「^ド獨^イ乙」を同じ「^ドドイツ」を表す1語と数えると、異なり語数は134となる。これらは、『九ポイント假名附活字見本帳』に載せられているカタカナルビのルビ付き活字全414例のうちの264例（64%）を使用することによって表すことのできる語である。残りの150例は、「6. ルビと漢字の配置と対応関係」にも示すように、漢字とルビの音が一致していないものであり、本稿では、

想定された語を明らかにすることができなかつたため、これらについては、今後さらに調査を進めていきたい。

5-1. 固有名詞への使用の可能性

本項では、『九ポイント假名附活字見本帳』のカタカナルビのルビ付き活字を組み合わせて作ることのできる固有名詞について述べる。固有名詞には、書名や商品名などさまざまな意味領域にわたるものが考えられるが、ここでは、新聞や雑誌等の文章中で繰り返し使用され、ルビ付き活字が必要とされる可能性が高いと考えられる、外国地名と外国人名について取り上げる。

はじめに、外国地名を取り上げる。表2は、外国地名への使用の可能性をまとめたものである。外国地名の中でもどのような種類のもをを示すことができるのかを明らかにするために、『日本語語彙大系』に用いられている固有名詞の分類の枠組みを参照している。その語の属する分類項目の名称をそのまま使用するとともに、適切な分類項目がない場合は、「地域名」とした。また、半島や島の名称は、「地形名」の下位に位置する「陸上地形名」とされていたため、その名称を使用している。

表2に見られるように、カタカナルビのルビ付き活字を組み合わせることによって、「国際地域名」、「国名」、「都市名」、「州名」、「省名」、「地域名」、「陸上地形名」を表すことができる。特に、「国名」「都市名」は、本稿で明らかになったものだけでも、多くの種類を表示できることがわかる。「都市名」には、アジアの地名も多く含まれており、「上海（シヤン／ハイ）」や「北京（ペ／キン）」など、中国での漢字表記をそのまま使用しているものも見られる。

本節の始めに、ルビ付き活字は、表記が固定化した結果だと述べた。ここでも大半がそうだとはいえるが、一つには定まっていないものもある。なお、ここに挙げる例は、いずれも『宛字外来語辞典』に記載のある表記である。

まず、カタカナルビが共通し、漢字が複数見られる地名では、「奥太利（オー／スト／リヤ）」と「奥地利（オー／スト／リヤ）」、「獨逸（ド／イツ）」と「獨乙（ド／イツ）」、「土耳其（ト／ル／コ）」と「土耳其（ト／ル／コ）」、「露西亞（ロ／シ／ア）」と「魯西亞（ロ／シ／ア）」が該当する。いずれも語を構成する漢字のうちの1つがゆれていることによる違いである。

次に、漢字が共通し、カタカナルビが複数見られる地名には、「伊太利（イ／タ／リー）」と「伊太利（イ／タ／リヤ）」、「瑞西（スキ／ス）」と「瑞西（スキツ／ツル）」^⑩、「蘇格蘭（スコ／ット／ランド）」と「蘇格蘭（スコツ／トラ／ンド）」がある。このうち「伊太利」「瑞西」は、漢字表記が既に固定化しているが、「イタリー」と「イタリヤ」、「スキス」と「スキツツル」という仮名で示される呼称にゆれが生じていることがわかる。

一方、「蘇格蘭」は、「スコットランド」というルビも共通しているが、ルビの区切り方の違いで、ルビ付き活字の組み合わせにバリエーションが生じている例である。この「蘇格蘭」のパターンについては、「6. ルビと漢字の配置と対応関係」でさらに詳しく取り上げる。

最後に、外国人名について、ルビ付き活字の使用の可能性を考えてみると、外国地名ほど数が多いわけではない。本稿で特定できたのは、以下の3語である。

路易（ル／イ） 奈翁（ナボレ／オン） 基督（キリ／スト）

表2 カタカナルビのルビ付き活字の外国地名への使用の可能性

分類項目	ルビ付き活字を組み合わせてできる外国地名	
国際地域名	亞細亞 (ア/ジア)	歐羅巴 (ヨー/ロツ/パ)
国名	愛蘭 (アイル/ランド) 阿弗利加 (ア/フリ/カ) 亞米利加 (ア/メ/リ/カ) 亞爾然丁 (アル/ゼン/チン) 伊太利 (イ/タ/リー) 伊太利 (イ/タ/リヤ) 英蘭 (イング/ランド) 印度 (インド) 埃及 (エチ/プト) 奧太利 (オー/スト/リヤ) 奧地利 (オー/スト/リヤ) 和蘭 (オランダ) 加奈陀 (カナ/ダ) 玖瑪 (キュー/バ) 希臘 (ギリ/シヤ) 哥倫比亞 (コ/ロン/ビア) 新嘉坡 (シン/ガポ/ール) 瑞西 (スウ/ス) 瑞西 (スウ/ツ/ツル) 蘇格蘭 (スコ/ツ/トランド) 蘇格蘭 (スコ/ツ/トランド) 西班牙 (ス/ペ/イン)	塞耳維 (セ/ル/ビア) 智利 (チ/リ) 丁抹 (デン/マーク) 獨逸 (ド/イツ) 獨乙 (ド/イツ) 土耳其 (トル/コ) 土耳其 (トル/コ) 新西蘭 (ニュー/ジー/ランド) 諾威 (ノール/ウエー) 巴奈馬 (パ/ナ/マ) 匈牙利 (ハン/ガ/リー) 芬蘭 (フィン/ランド) 伯刺西爾 (ブ/ラ/ジ/ル) 佛蘭西 (フ/ラン/ス) 勃牙利 (ブル/ガ/リヤ) 白耳義 (ベル/ギー) 波蘭 (ポー/ランド) 墨西哥 (メキ/シ/コ) 羅馬尼亞 (ルー/マ/ニア) 露西亞 (ロ/シ/ア) 魯西亞 (ロ/シ/ア)
都市名	浦鹽斯德 (ウラ/ジホ/スト/ツク) 哥倫比亞 (コ/ロン/ビア) 君士坦丁堡 (コン/ス/タン/チノ/ー/ブル) 桑港 (サン/フラン/シスコ) 市俄古 (シ/カ/ゴ) 蘇士 (スエ/ズ) 紐育 (ニュー/ヨーク) 巴里 (パリ) 哈爾賓 (ハ/ル/ピン) 漢堡 (ハン/ブル/グ) 伯林 (ベル/リン) 孟買 (ボン/ベイ) 馬耳塞 (マル/セイ/ユ) 莫斯科 (モ/ス/クワ)	羅馬 (ロー/マ) 倫敦 (ロン/ドン) 華盛頓 (ワ/シン/トン) 廈門 (ア/モイ) 廣東 (カン/トン) 西安 (シー/アン) 上海 (シャン/ハイ) 青島 (チン/タオ) 南京 (ナン/キン) 北京 (ペ/キン) 河内 (ハノ/イ) 香港 (ホン/コン) 馬尼刺 (マ/ニ/ラ)
州名	布哇 (ハ/ワイ)	
省名	廣東 (カン/トン)	
地域名	烏拉兒 (ウ/ラル) 薩哈拉 (サ/ハラ) 西伯利亞 (シ/ベ/リア)	錫蘭 (セイ/ロン) 西藏 (チベ/ツト) 普魯西 (ブ/ロ/シヤ)
陸上地形名	爪哇 (ジャ/ワ) 巴爾幹 (バル/カン) 馬來 (マ/レー)	

5-2. 一般名詞への使用の可能性

次に、一般名詞への使用の可能性について述べる。『九ポイント假名附活字見本帳』に挙げられているカタカナルビのルビ付き活字を組み合わせる一般名詞は、本稿での調査分析により、表記の違いを含めて延べ52例が判明した。それらを『分類語彙表 増補改訂版』の枠組みで分類して示す^⑧と、表3のようになる。

表3 カタカナルビのルビ付き活字の一般名詞への使用の可能性

部門	中項目	一般名詞	
抽象的關係	量	記録 (レコノード)	弗 (ドル)
		珊 (サンチ)	噸 (トン)
		滲 (サンチーム)	呎 (フィート)
		志 (シルリング)	頁 (ページ)
		打 (ダース)	封度 (ポンド)
		兩 (テール)	磅 (ポンド)
		片 (ベンス)	哩 (マイル)
		節 (ノット)	馬克 (マルク)
		仙 (セント)	碼 (ヤード)
人間活動の主体	社会	停車場 (ステーション)	
生産物 および用具	資材	硝子 (ガラノス)	把手 (ハンノドル)
		燐寸 (マツノチ)	鎖 (チエーン)
		洋杖 (ステノツキ)	
	衣料	莫大小 (メリノヤノス)	
		襪衣 (シャノツ)	
		絹帽 (シルクノハツト)	
	食料	麵麩 (パン)	麥酒 (ビーノル)
		珈琲 (コーノヒー)	阿片 (アノヘン)
		三鞭 (シヤンノペン)	
住居	天幕 (テンノト)		
	卓子 (テーノブル)		
	卓 (テーブル)		
道具	洋刀 (ナイノフ)	拳銃 (ピスノトル)	
	洋盃 (コツノプ)	短銃 (ピスノトル)	
	刷毛 (ブラノシ)	檣 (マスト)	
	半巾 (ハンノカチ)	喇叭 (ラツノバ)	
機械	唧筒 (ポンノブ)		
土地利用	軌道 (レーノル)		
	隧道 (トンノネル)		
自然物 および自然現象	物質	瓦斯 (ガノス)	
	生命	虎列刺 (コノレノラ)	
		實布垓里亞 (ジノフノテノリノア)	
		黒死病 (ペノスノト)	
植物	橙 (ヲレンジ)		

最も多いのは、「生産物および用具」という部門に分類されるものである。中項目を見ると、資材、衣料、食料、住居、道具、機械、土地利用など物と直接結びついている語であるとわかる。

抽象的なものは、量を表す語に集中している。「頁」^{ページ}「哩」^{マイル}など、漢字1字で単位を表しているものが多く見られる。

一般名詞にも外国地名同様、ゆれがみられる。「卓子（テー／ブル）」「卓（テーブル）」のようにルビが同じであり、漢字が異なっている例が挙げられる^⑤。

ルビと漢字の間のずれはこうした表記のゆれだけではない。「封度（ポンド）」と「磅（ポンド）」のように、重さの単位と貨幣の単位を漢字で使い分けているものや、「拳銃（ピス／トル）」と「短銃（ピス／トル）」^⑥のように、意味の違いを漢字によって表そうとしているものもある。

さらに、一般名詞におけるルビと漢字の関係を考えると、音的表記と意味的表記の違いが表れている。音的表記としては、例えば、「瓦斯（ガ／ス）」「珈琲（コー／ヒー）」「喇叭（ラツ／パ）」「虎列刺（コ／レ／ラ）」「實布埜里亞（ジ／フ／テ／リ／ア）」などの組み合わせが可能である。

表3においては意味的表記が優勢である。まず、「軌道（レー／ル）」「隧道（トン／ネル）」といった漢語を当てたものが見られる。そして、漢語として単独使用はなされないが、ルビの外来語に対して、訳に当たる漢字を組み合わせたものもある。例えば、西洋のものであるという意味を示せる「洋」を使った語では、「洋杖（ステ／ツキ）」「洋刀（ナイ／フ）」「洋盃（コツ／ブ）」など、外来語の指すものに近い形状をした既存のものを示す漢字が組み合わせられている。また、「絹帽（シルク／ハット）」のように、シルク＝絹、ハット＝帽という訳語を並べたようなものもある。外国から物とともに入ってきた語が、日本語に取り入れられる際に、どういふものなのかわかるようにさまざまな訳が当てられたが、ルビ付き活字で表される語は、その中でもルビも、漢字も、その組み合わせも固定化したものだと考えられる。

上に挙げた外来語のほかには、漢語の「林檎（リン／ゴ）」も表すことができる。

6. ルビと漢字の配置と対応関係

前項ではルビ付き活字を組み合わせた語の単位での使用を想定することによって、固有名詞と一般名詞の表示の可能性を考えてきた。最後に、ルビ付き活字によって表すことができる語について、ルビと漢字の関係を、主にその配置から考えてみたい。

ルビ付き活字を鋳造する場合、漢字の音とルビを対応させて作ることができる。『九ポイント假名附活字見本帳』にも、「安」^{アン}「印」^{イン}「古」^コ「市」^シ「然」^{ゼン}「陀」^ダ「奈」^ナ「蘭」^{ラン}「里」^リ「浦」^{ウラ}などが見られる。

しかし、必ずしも漢字の音とルビが対応しているとは限らない。非対応の原因は2つあり、1つは意味的表記であるために、ルビと漢字との間に音に関する対応関係がないこと、もう1つは活字のスペースの問題である。

ここで、ルビ付き活字に表れたルビと漢字の非対応を考えるために、活字におけるルビの配置のされ方をまとめたい。

まず、ルビ用の活字というものは、縦書きでいえば、漢字1字分の高さに2文字分を振ることができるように作られている。つまり、その活字の縦の長さは、本行部分1字分の半分のサイズになっているのである。そのため、ルビが3文字以上になると、1つの漢字分のスペースに収まりきらず、前後の文字のルビ部分にはみ出して用いられる。

それに対し、ルビ付き活字では、「帽（ハット）」のように、漢字1文字に対し、ルビ3文字分を詰めて配置したものが見られる。『九ポイント假名附活字見本帳』でも、ルビの文字数が多いものが見られ、3文字以上を配するものを文字数別に示すと、次ページの表4のようになる。ルビの文字数で最も多いのは

「滲（サンチーム）」「桑（サンフラン）」「志（シルリング）」の5文字分である。5文字となると、ルビ付き活字にしても漢字1字分の縦の長さでは完全には収まりきらないが、ルビ用の活字を用いる場合よりは圧縮された状態になっている。

つまり、漢字1字分に対するルビの文字数が増えれば増えるほど、ルビ付き活字のルビ部分は小さく見にくいものになる。それを避けるために、ルビ付き活字の中には、他のルビ付き活字と組み合わせて特定の語を作ることを前提にしたものが見られる。なぜそれがわかるかといえば、「車」^ニ「録」^ニ「麴」^ニ「蘭」^ニなどルビ部分が「一」（長音符号）や「ン」で始まるものがあるからである。こうした長音や撥音から始まる語は日本語にはなく、漢字の読みを示すルビを振った活字として、単独での使用はありえない。

他のルビ付き活字と組み合わせて特定の語を作ることを前提とした活字は、漢字の音とは異なる単位で区切られたルビが付けられている。ルビ付き活字も、漢字1字分に対応させられるルビは原則2文字というルールに沿うため、意味的表記の場合は、ルビは適当な箇所で行われることになる。それは、音的表記の場合でも同じである。漢字の読みを指定するという本来の目的を達するためには、漢字1字に対応する読みをルビとして振るのが適切である。しかし、漢字1字に対して振ることのできるルビの文字数には限界があり、あまり多い文字数を振ることは難しい。また、ルビが特定の文字にのみ集中することも読みにくさを助長する。そのため、ルビのバランスを悪くすることよりも、漢字との対応に関係なく、ルビがなるべく均等になるようバランス良く配置するということが行われている。

『九ポイント假名附活字見本帳』のルビ付き活字を組み合わせることができる語についても、ルビと漢字が対応していないものが見られる。以下に意味的表記と音的表記に分けて例を挙げる。

(A) 意味的表記でルビと漢字が対応しないもの

- 洋盃（コツ／ブ） 洋杖（ステ／ツキ）
- 半巾（ハン／カチ） 天幕（テン／ト） 絹帽（シルク／ハット）
- 莫大小（メリ／ヤ／ス） 黒死病（ペ／ス／ト） 麴麴（パ／ン）

表4 ルビの文字数別一覧

ルビの文字数	漢字	ルビ	漢字	ルビ	漢字	ルビ	漢字	ルビ
3文字	吋	インチ	莊	チヤン	碼	ヤード	絹	シルク
	英	イング	令	リング	哩	マイル	担	ビコル
	帽	ハット	留	ルビー	抹	マーク	彼	ピータ
	漢	ハンブ	育	ヨーク	檣	マスト	仙	セント
	牛	ニユー	打	ダース	芬	フィン	聖	セント
	紐	ニユー	奈	ナポレ	兩	テール	瑞	スキツ
	新	ニユー	蘭	ランド	愛	アイル	蘇	スコツ
	磅	ポンド	威	ウエー	玖	キュー	典	ーテン
	頁	ページ	節	ノット	三	シヤン	龍	ーリエ
	片	ペンス	諾	ノール	上	シヤン	堡	ーブル
丁	チノー	瓦	クラム	港	シスコ	得	ーspb	
4文字	鎖	チエーン	橙	ヲレンジ	法	フランク		
	留	ルーブル	呎	フィート	卓	テーブル		
5文字	滲	サンチーム	桑	サンフラン	志	シルリング		

麥酒（ビー／ル） 硝子（ガラ／ス） 卓子（テー／ブル）
拳銃（ピス／トル） 短銃（ピス／トル） 燐寸（マツ／チ）
唧筒（ボン／プ） 把手（ハン／ドル） 隧道（トン／ネル）
記録（レコ／ード） 刷毛（ブラ／シ） 襦衣（シヤ／ツ）
停車場（ステ／ーシ／ヨン） 軌道（レー／ル）
桑港（サンフラン／シスコ）

(B) 音的表記でルビと漢字が対応しないもの

蘇格蘭（スコツ／トラ／ンド） 新嘉坡（シン／ガボ／ール）
漢堡（ハンブ／ルグ） 馬耳塞（マル／セー／ユ）
和蘭（オランダ） 河内（ハノ／イ）

(A) の意味的表記は、そもそも漢字と音が対応しているわけではないが、「半巾（ハン／カチ）」や「天幕（テン／ト）」のように、「半」「天」という漢字音と一致する部分が出てくる場合もある。また、「拳銃（ピス／トル）」と「短銃（ピス／トル）」の「銃（トル）」のように、その漢字とルビの関係が特殊でありながら、二種類以上の語表記に使用されるものもある。

(B) の音的表記は、漢字との対応は可能でありながら、区切り方が漢字に対する仮名の配置バランスの方を重視しているために、非対応になっている例である。「蘇格蘭（スコツ／トラ／ンド）」であれば、蘇＝ス、格＝コツト、蘭＝ランドというように音に対して当てるのが適切だが、その文字数のバランスの悪さから、区切り方を変えていると考えられる。同様に、音に合わせると、「新嘉坡（シン／ガボ／ール）」は新＝シン、嘉＝ガ、坡＝ポール、「漢堡（ハンブ／ルグ）」は漢＝ハン、堡＝ブルグ、「馬耳塞（マル／セー／ユ）」は馬＝マ、耳＝ル、塞＝セーユ、「和蘭（オランダ）」は、和＝オ、蘭＝ランダ、「河内（ハノ／イ）」は河＝ハ、内＝ノイとなるが、前後のバランスを見て調整されているのだと考えられる。ここに挙げた用例では、「ハノイ」や「オランダ」などの文字数の短い語でも起こっており、ルビの位置を前の字の方にずらす傾向が見られる。

こうして見てくると、ルビ付き活字は、1字の単位で多く出現する漢字とルビを組み合わせで一体化させているというだけでなく、語の単位での出現数が多いものを想定して作られていたと考えられる。

7. 結論

『九ポイント假名附活字見本帳』に載せられているカタカナルビのルビ付き活字は、主に外来語、特に外国地名を表すためのものとして用いられていたと考えられる。

そして、ルビ付き活字は、複数を組み合わせることによって語を表すことが想定されていたことが明らかになった。それは、カタカナルビは、必ずしも漢字の読みと一致するものではなく、その配置は、前後に別の活字を組み合わせたときにバランスの良いように作られているからである。そうしたルビと漢字のずれのあるものは、原則として、特定の語専用の活字として用いられていたと考えられる。

本稿では、『九ポイント假名附活字見本帳』のカタカナルビ部分のみを取り上げて分析・考察を行ってきたが、小さなルビ用の活字を1つ1つ付ける手間を省きたいというルビ付き活字誕生の背景を踏まえると、繰り返し出現し、多用される語に対して作られたと考えられる。つまり、活字見本帳に挙げられてい

るルビ付き活字というのは、それだけ使用頻度の高いものであり、その表記も固定化しているものだと見える。そのため、活字見本帳からのルビ付き活字から、当時求められていた外来語の様相を知ることができるのである。今後も本稿での成果を同時代の外来語研究に活用していきたい。

注

- ① 『印刷事典』の「見本帳」(p.517)の説明を要約した。
- ② 倉島(2002:182)
- ③ 同じくルビ付き活字を取り上げた『七ポイント假名附活字見本帳』(秀英舎、昭和4年4月15日発行)についても、印刷博物館にて閲覧したが、そちらにはカタカナルビを付したルビ付き活字は見られず、ひらがなルビの付されたものみの掲載であった。
- ④ 本稿での論文の引用や活字見本帳の用例は、できる限り本文の表記通り示したが、入力環境ゆえに反映できなかったものもある。
- ⑤ 印刷博物館は、凸版印刷株式会社が設立した、東京都文京区にある印刷文化や技術を紹介する博物館である。
- ⑥ 大日本印刷ホームページ「沿革」
<http://www.dnp.co.jp/about/history01.html> (2016年9月21日参照)
- ⑦ 大日本印刷ホームページ「沿革」
<http://www.dnp.co.jp/about/history01.html> (2016年9月21日参照)
- ⑧ 「ヌ部」「ム部」「ヒ部」「キ部」「ケ部」「エ部」という見出しおよび該当する活字の掲載はない。
- ⑨ 「一部」にはルビが長音符号で始まるものが載せられている。
- ⑩ 本稿では、「聖(セント)」で「聖」に「セント」というルビが付いていることを表す。ルビ付き活字の2文字分以上からなる語の場合は、例えば「愛蘭(アイル/ランド)」のように表記する。これは、「愛」に「アイル」というルビが、「蘭」に「ランド」というルビが付されている状態を示す。
- ⑪ 「歐」を略称表記、「歐羅巴」を非略称表記と呼んでいる。
- ⑫ 「英吉利」の「イギリス」をルビ部分、「英吉利」を本行部分とする。
- ⑬ 『宛字外来語辞典』では、「スイス」「スイツツル」の表記しか載せられていなかったが、「瑞西(スキ/ス)」は、麻生正藏「男優れるか、女劣れるか△△△男優女劣論を評して男女差別的対等論に及ぶ△△△」(『婦人公論』大正6年)、「瑞西(スキツツル)」は、吉野作造「倒壊せんとする官僚主義の悩み」(『婦人公論』大正8年)に見られる。
- ⑭ 「ラッパ」「レール」は、『分類語彙表 増補改訂版』には掲載がなかったため、漢字表記等をもとに、類似する語を探し、分類した。
- ⑮ 『宛字外来語辞典』に「卓(テーブル)」の表記が掲載されている。また、「卓子(テー/ブル)」は、『宛字外来語辞典』には載せられていないが、加藤一夫の「我懺悔に表はれたるトルストイ」(『婦人公論』大正9年)に見られる。
- ⑯ 『日用舶来語便覧』(明治45年)に、「ピストル…短銃又は拳銃」と載せられており、ピストルという外来語に当てる漢字として適切であると判断した。

参考文献

- 宛字外来語辞典編集委員会編(1991)『宛字外来語辞典』柏書房
井口佳重(2016)「昭和3年の大阪毎日新聞社「字音仮名遣ひ対照表」」国文学(100), pp.528-505
井口佳重(2015)「近代的メディアのルビの構造と字音仮名遣いの変相」『国文学』(99), pp.294-265
石井久美子(2014)「『仮名読新聞』の外来語の表記」『国語文字史の研究』十四、和泉書院、pp.171-185

『九ポイント假名附活字見本帳』に見るルビ付き活字

- 石井久美子 (2016) 「大正期『婦人公論』に見られる外国地名・人名とその表記—『中央公論』と比較して—」『日本語学会2016年度春季大会予稿集』 pp.135-142
- 片塩二郎 (2004) 『秀英体研究』大日本印刷株式会社
- 株式会社DNP年史センター編 (2007) 『大日本印刷百三十年史』大日本印刷株式会社
- 倉島節尚 (2002) 「活字印刷と日本語」『現代日本語講座第六巻文字・表記』明治書院
- 国立国語研究所編 (2004) 『分類語彙表 増補改訂版』(国立国語研究所 資料集14) 大日本図書
- 今野真二 (2009) 『振仮名の歴史』集英社
- 佐藤武義・前田富祺編 (2014) 『日本語大事典』朝倉書店
- 田島優 (1998) 『近代漢字表記語の研究』和泉書院
- 棚橋一郎 (1912) 『日用舶来語便覧』光玉館 (松井栄一・曾根博義・大屋幸世監修 (1995) 『近代用語の辞典集成 24』大空社)
- 日本印刷学会 (2002) 『印刷事典 第五版』印刷朝陽会
- 松田幾之助 (1928) 「ルビ付の活字」大阪朝日新聞社整理部編『新聞記者打明け話』世界社
- 矢作勝美 (1976) 『明朝活字：その歴史と現状』平凡社
- 矢作勝美 (1981) 「活字のはなし一六 ルビ付活字」『ちくま』第127号、p.1
- NTTコミュニケーション科学研究所監修 (1997) 『日本語語彙大系』全5巻、岩波書店
- 大日本印刷ホームページ「沿革」
<http://www.dnp.co.jp/about/history01.html> (2016年9月21日参照)

謝辞 凸版印刷株式会社印刷博物館の学芸員である石橋圭一氏に、ルビ付き活字についてご教示いただきました。また、『九ポイント假名附活字見本帳』および『七ポイント假名附活字見本帳』の撮影および掲載をご快諾くださったことに、御礼を申し上げます。